

第7回 慶喜は姿を見せたか？

文：佛教大学 歴史学部歴史学科 教授 青山忠正



慶応3（1867）年10月12日、新発田藩の京都留守居、寺田喜三郎（てらだきさぶろう）のもとに、次のような回状が廻されてきた。発給者は、徳川家（幕府）の大目付戸川安愛（とがわやすなる）、目付設楽岩次郎（しだらいわじろう）の両名である。それには、「国家の大事」について、見込みを尋ねたいことがあるので、各藩とも京都詰の重役か、または事情の分かった者が、13日の正午に、二条城へ出頭するように、とあった。

この回状による諸連絡の仕組みは、以前から慣例化されたもので、回状順達の組合が組織され、ちょうど町内会で回覧板を回すように、様々な事柄が伝達されてくるのである。

喜三郎は、この召集に應じて、13日午前中に二条城に入り、ともに呼び出しを受けた相役たちと一緒に二の丸御殿の大広間へ詰めた。この時、召集を受けたのは、10万石以上の大規模大名である。該当する大名は、全国で50家あり、そのうち集まったのは42家だった。下総佐倉の堀田家や、若狭小浜の酒井家、山城淀の稲葉家、それに会津松平家、桑名松平家などが来ていないが、彼らは家門または譜代の重鎮なので、すでに12日の段階で、將軍から状況を知らされていたはずである。

その席で、大目付戸川安愛に引き続き、老中の板倉勝静（いたくらかつきよ）が襖ざわに出座して、「御書き付け3通を渡すので、見込みの趣を、腹藏なく申し上げるように。將軍が直々に御聞き遊ばされる」、と通達した。そのあと、大目付の戸川と、目付の設楽が、その書き付け、すなわち政権奉還の上表草案などを配布して回り、見込みを申し上げたい者は居残るようと、指示した。大部分の者は、特に申し上げるようなことはない、として退出したが、薩摩・土佐・芸州・備前・宇和島の5藩、6人だけは居残った。6月以来、大政奉還の実現に向けて画策してきた人々であり、実際に建白を実行したのは、土佐、芸州の2藩である。

そこで振り出しに戻るようだが、42家の代表が集まった席に、將軍慶喜が姿を現したか、といえば、答えは否である。慶喜が対面したのは、居残った、薩摩の小松帯刀や土佐の後藤象二郎ら6人だけ。例外的な処遇であった。『明治天皇紀 附図』に、その模様が描かれている。